インドネシアとマレーシア：近隣の二国

Dr Alexander Ressos, TEP
Attorney-at-Law (Switzerland and Germany),
Solicitor (England & Wales and Hong Kong)
Of Counsel, KGP Legal LLC
alexander.ressos@kgplegal.com.sg
www.ressos.com.sg

シンガポールには、海峡と歴史、そして日々の経済生活の大部分を共有する二つの隣国があります。東南アジアで最も人口の多い国であるインドネシアは、シンガポール海峡を挟んで南へフェリーですぐの距離にあります。1965年にシンガポールが分離したマレーシアは、北のコーズウェイの向こう側にあります。両国はこの都市に水、労働力、食料、エネルギー、そして産業用地を供給しています。同時に、シンガポールの銀行、ウェルスマネジメント会社、ファミリーオフィスの顧客の大きな部分も両国から来ています。本章では、金融センターの視点から、この近隣二国との経済関係を考察します。具体的には、インドネシアの富裕家族がシンガポールに保有する資産、リアウ諸島とジョホールの越境経済圏、ジャカルタとクアラルンプールが未申告資産を国内に呼び戻そうとした税務恩赦、そして近接性が生み出す機会とリスクを取り上げます。

このテーマには長い歴史があります。これまでの章で示したとおり、1819年の自由港はジョホール・リアウ王国の領土に建設され、その繁栄は当初から群島とマレー半島の交易に依存していました。1824年、1965年、そ

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.

してその後に引かれた政治的国境は、こうした結びつきの法的形態を変えましたが、それを断ち切ることはありませんでした。一つの地域内の交易であったものが、越境交易、越境投資となり、さらに越境ウェルスマネジメントとしての性格を強めていきました。ここから生じる問いは、より大きな隣国のそばに位置するあらゆる金融センターに共通するものです。隣国の市民の富にどこまで奉仕してよいのか。隣国が税法を厳格化したとき、どう対応するのか。そして、成長の恩恵を国境を越えてどのように分かち合うのか。

ジュネーブ巻は、フランスに囲まれイタリアにも近い都市について、同じ問いを立てました。107,200人の越境通勤者を抱えるジュネーブとフランス側後背地との関係、そしてフランスとイタリアがスイスに保有された資産から税を回収するために実施した適正化プログラムは、示唆に富む類例となります。本章末尾の比較では、これらの類例がどこまで当てはまり、どこでシンガポールの立場が異なるのかを示します。シンガポールの隣国は、自国の金融システムがなお成長途上にある大規模な新興経済国だからです。

要点

シンガポールは、インドネシアの富裕家族の資産にとって最も重要な国外の保管先です。2016〜2017年のインドネシアの税務恩赦では、インドネシア人はシンガポールに保有する資産として751.19兆ルピアを申告しました。これは申告された国外資産全体の約73%に相当しますが、シンガポールから国内に還流したのは約85兆ルピアにとどまりました。シンガポールはまた、インドネシアに対する外国直接投資の群を抜いて最大の出資国であり、その一部はシンガポールの持株会社を経由したインドネシアおよび国際的な資本です。リアウ諸島では、バタム、ビンタン、カリムンが1970年代以降、とりわけ1989年の成長の三角地帯以降、シンガポールの産業経済の延長として開発されてきました。インドネシアとの犯罪人引渡条約は2024年3月から発効しています。マレーシアとの間では、2025年1月7日に

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.

合意されたジョホール・シンガポール経済特区が約3,571平方キロメートルを対象とし、5%の法人税率、ナレッジワーカー向けの15%の所得税率、そしてフォレスト・シティのシングル・ファミリーオフィスに対するゼロ税率を提供しています。近接性はシンガポールに顧客、土地、労働力、成長をもたらしますが、同時に金融センターを隣国の資本規制、税制、金融犯罪、環境危機にさらすことにもなります。

Disclaimer

This article is provided for general information only. It is based on publicly available sources as at its date of publication. These sources have not been independently verified against licences, regulatory registers or the records of the entities concerned. It is not legal, tax, financial or investment advice. Nor is it a recommendation to invest in, transact with or use the services of any entity mentioned. Law and regulation change frequently, so the content may be incomplete or outdated. To the fullest extent permitted by law, Dr Alexander Ressos and the publisher of SingaporeIQ exclude all liability for loss or damage arising from the use of or reliance on this article. Readers should obtain advice on their specific circumstances before acting or refraining from action.

Names and trademarks of the entities discussed belong to their owners and are used for identification only. Their mention implies no endorsement, affiliation or allegation of wrongdoing. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. Corrections and updates: contact@ressos.com.

© 2026 Dr Alexander Ressos. This article may be quoted with attribution to SingaporeIQ (SingaporeIQ.com). Reproduction in full and any commercial use require prior written consent. The Legal Terms at https://singaporeiq.com/legal-terms apply.

Author contact: Dr Alexander Ressos, TEP · contact@ressos.com